# フランス文学　アポリネール研究

秋田大学教育文化学部
地域文化学科国際文化講座
辻野　稔哉

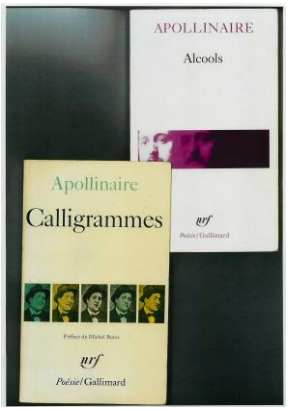
フランスの詩人、小説家、批評家などとして知られているアポリネールは、ポーランド系ロシア帝国人の母親とイタリア軍人の父の間に、ロシア国籍を持って、1880 年ローマに生まれた。モナコ、カンヌ、ニースといったフランスの地中海沿岸で少年期を過ごしたアポリネールは、1899 年パリにやって来る。その後の約 20 年間、彼は詩人としてまた小説家として活躍する。さらに、ピカソを始めとするキュビストや、マリー・ローランサンその他多くの画家達の友人として美術批評を行ったり、アンドレ・ブルトンやジャン・コクトーといった作家達の先輩格として、様々な芸術活動を行った。1914 年に第一次世界大戦が勃発した際、彼はロシア国籍ながらフランス軍に志願して実戦に参加する。前線にいた 1916 年 3 月、フランスへの帰化がようやく認められる。しかしその数日後、砲弾の破片を頭部に受け負傷、一命はとりとめたものの、パリへ送還され手術を受ける。除隊後、文筆活動を再開させるが、1918 年、その年猖獗を極めた「スペイン風邪」として知られるインフルエンザによって死去した。

アポリネールが活動した 20 世紀初頭、それはライト兄弟が初飛行に成功して以来、フランスでも盛んに飛行機の形が模索されていた時代であり、またモータリゼーション前夜とも言われた時代である。そして、電信や電話の回線が世界的に広がり、蓄音機や SP 盤さらに映画といった、様々なメディアテクノロジーが普及し始めた時代であった。

こうした社会の変化に対して、芸術の分野でも様々な新しい試みがなされた。例えばピカソは 1907 年に『アヴィニョンの娘達』という、キュビスムの元祖と呼べる様な大胆な作品を描き、アポリネールを含む友人達を驚愕させるが、やがてアポリネールは、ピカソやキュビスト達を強く擁護する論陣を張り、自らの詩や小説にも新たな地平を開こうと考えた。

さて、詩人アポリネールの代表的作品と言えば、『アルコール』と『カリグラム』という二つの詩集である。詩集『アルコール』は、近代的な都市生活情景

などを活写して有名になる。また従来の詩の規則に縛られず、作品ひとつひとつが持つリズムを優先するため、全ての詩から句読点を削除した。これは当時としては画期的であった。中でも、Sous le pont Mirabeau coule la Seine ...という有名なフレーズで始まる「ミラボー橋」は良く知られており、堀口大學の訳詩集『月下の一群』にも収められている抒情詩である。もう一つの詩集のタイトルになっている「カリグラム」とは、「カリグラフィ」＝文字を美しく見せる術と「イデオグラム」＝表意文字という二語から作られた単語である。代表作は「短剣で刺された鳩と噴水」であろう。内容は、戦争で遠く離れた恋人や友人達を思う歌だが、文字で絵を描く手法で鳩、噴水、水盤が描かれている。全てがカリグラムで構成された詩集ではないが、印象的なカリグラムがいくつも収められている。




こうした試みからも分かる様に、アポリネールの詩の在り方とは、言語表現としての模索・実験という側面を持ち、20 世紀の新たなテクノロジーの時代に、詩にはどんな表現が可能なのか、という問題意識を内包したものなっている。

アポリネールが使い始めた「シュールレアリスム」という語が、彼の死後アンドレ・ブルトンを中心とする一大ムーブメントとなったこともあって、アポリネールはシュールレアリスムの先触れを行った詩人と見做された時代もあった。しかし現在では、シュールレアリスムだけでなく、様々な芸術の可能性を探ろうとした詩人であって、同時代以降の多くの人々にその影響が及んだ詩人である、と考えられる様になった。従って、現在のアポリネール研究者達は、彼が残した作品や文章に、単に文学・芸術史上の一作家の姿だけではなく、例えば 19 世紀的な生活感覚からの変化や、人類が初めて経験した近代的な戦争体験とその表象、あるいはメディア横断的に広がる感性といった問題性の現れを感じ取り、それらをめぐってアポリネール作品の特質を読み解いて行こうとしている。